

「何も分かっていなかったのだな、君は」

腹の奥まで轟くような、低く掠れた声が響いた。

掴まれ、布団に押し付けられた手首が少し軋んでいる。覆い被さる彼の目は熱っぽくも据わっていて、まばたき一つせずになたしを射抜いていた。いつもみたいな、目尻に皺の寄る優しい笑みはどこにもない。

「私が君以外を抱いて——それで平気だと、そう言っているんだな？」

下がりかちの眉尻も今は持ち上がっている。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。



ろこもこうさぎ

絢辻 透

早咲きの桜の花びらが、ひらりと部屋に舞い込む頃。
わたしは彼と結婚をした。

「不束者ですが、よろしくお願いいたします」

式やご挨拶がようやく終わり、二人きりになった和室で、三指をついて頭を下げたとき。

薄桃色の花びらが畳に落ちたのをばんやりと見ていたら、ふ、と笑いとも吐息ともつかぬ気配がして、思わず顔を上げた。

「そんなに改まらないでいいんだ。……不束者はこちらのほうだよ。どうぞ、よろしく」

落ち着いた低い声が、あの時すぐには頭に入ってこなかった。

一日中ずっと緊張していたような面持ちが、ほんのわずか崩れていたからだ。

大切に思っているよ、と伝えてくるような穏やかな視線と共に、わたしの頭についた花びらを取ってくれて。

息が止まるような思いをした、そんな日から――

――もうすぐ、半年になっちゃうな……)

あかね色に染まる空を見てひとつため息をつき、縁側から庭へと降りた。夏ももう終わりがけだ。

夕焼け空でもまだ汗ばむほどの気だるげな暑さが辺りを包んでいた。あの日ひらひらと舞っていた桜はすっかり姿を変え、濃い緑色になって風に揺れている。

(こんなに月日が経ったのに、まだ、わたしには……)

――触れてもらえない。

結婚してからずっと一緒の部屋で寝ているというのに、未だに指一本触れられたことがない。

寝る前には必ずわたしよりも少し厚い唇を額に落としてくれるが、それだけだ。

掠めるような、触れるとも言いきれないもの。

瞼を落としながら立てかけられた箒を取り、浮かない気持ちで落ちた葉を集めていく。

「桜子さん」

「あ……っ？ 修一朗さん」

しばらく掃き掃除に没頭しているうちに声をかけられる。

気がつけばわたしの旦那様——森宮 もりみや 修一朗さん しゅういちろう が縁側に立っていた。広い肩幅に和服姿がよく似合っている。

うつすらと肌の透ける、涼しげな絹の着物姿だ。

両袖に腕を通すようにして組んでいる姿は、代々受け継がれてきた森宮本家の、広いお屋敷に似合いの貫禄があった。

「すまないな、ここは広くて大変だろう。そうだ、私も手伝おう」

「そんな、修一朗さんに手伝わせると知られたらわたしが怒られてしまいますから……」

「いや、こういう事こそ私が……お、っと」

「駄目ですよ……！ それよりどうなさったのですか、何かお探し物ですか？」

箒を持って縁側に降りようとする修一朗さんを慌てて押し留めた。

困ったように目尻に笑い皺を浮かべられた。

わたしと干支がひとまわり違うほど年上の彼だが、整った顔は重ねた年のぶん厚みを帯びたような、大人の色気を纏っている。

（でも修一朗さん、いつもならこの時間はまだお仕事なんだし……）

修一朗さんが当主を務める森宮家は、この地に何代も続く名家だ。

由緒あるこの地域に根付く、多数の老舗旅館や料亭の経営を一手に担っている。

父親を早くに亡くし家督を継いだ修一朗さんは、若くして経営の才覚を

發揮し、いくつか傾き気味だった旅館をひとつひとつ丁寧に手を加えて賑わいを取り戻していった。

いまは地域全体の活性化にまでなっているという功績の持ち主だ。

「いや、実は母さんを探しているんだ。確認したい書類があるんだが、持っていないからしょうがないね」

「お義母様ですか。縁側とこちらのお庭は通られていませんね。確か今日は離れでお茶会があると仰っていたような……」

「ああ、離れか。行ってみるよ、ありがとう。……それと、桜子さん」
「はい？」

緩やかに首を傾げた修一朗さんが、少し遠慮がちに袖の下から大きく逞しい手を出した。

ゆったりとした所作で、わたしの着物の衿を握り、く、と詰めるように直される。

知らないうちに乱れていたらしい。呼吸がわかるほど近づいた距離に、どきりと心臓が高鳴った。

「……衿が開いてしまっている。暑いのに、今日は倉庫の整理までしていたのだろう」

「し、知っていらつしやったんですね……」

「ああ。屋敷の仕事をしてくれるのは助かるが、……こんな風になるまで働かなくとも良いんだぞ」

「あ……」

いつも優しげなのに、真顔になるとどこまでも精悍な顔立ちだ。

目にかかるほど長い前髪の奥から、じつとこちらを見つめてくる視線に目が離せなくなる。

夕日に照らされた瞳は優しくも、どこか憂いを帯びたような色を放っていた。

「そんな、大丈夫です。少しでもお役に立てればと……それに衿なんてほら、誰も見ていませんし」

「見ているよ」

「えっ？」

「私が」

囁くような、お腹に轟くような。

そんな低音の聲が響いて、じわりと頬に熱がこもった。

どう返せばいいか迷っている間に、鎖骨が覗かないよう衿元を合わせられる。

それから、ゆっくりと手が離れていった。

「……離れに行ってくるよ。庭の掃き掃除はもう終わりにして、夕飯まで休みなさい」

「あ——あ、ありがとう、ごさいます……っ」

顔を合わせられない。夕方で顔色が分かりにくくて助かった。

身を翻し、大きな歩幅で、けれどゆったりと歩いていく修一朗さんの背中を見送る。

高鳴る心臓を抑えながら、唇を噛みしめた。

（大切にして貰えてるのはわかる——……けど。これが、夫婦の距離感かって言われると……）

塵取りで集めた落ち葉をまとめながら、小さく息をつく。

わたしと修一朗さんの結婚は、一応はお見合いという体裁があった。三十五を過ぎても修一朗さんは仕事一辺倒で浮いた話がなかったらしく、とうとうはとこであるわたしにまで縁談の話が降りてきたのだ。

けれどわたしは知っている。

この結婚の実態は、森宮の家を守るための縁組だ。分家に散った土地や株を本家に戻すため——つまりはほとんど、政略結婚のようなもの。

（だから、わたしには……）

物思いに耽る中、手が止まる。

こうして結婚したわたしには明確な役割があるはずだ。

屋敷の誰もみな、はつきりとは口に出さないけれど――

「あら、桜子さん？」

「おつ、お義母様……！？」

ぼーっと考えているうちに、先ほど修一朗さんが出てきた廊下からお義母様がやってきた。

今日も薄紫色の小花が散る、上品な着物を着ていらつしやる。美しく清廉さのある顔立ちで、目元が修一朗さんとまったく一緒だ。

「桜子さん、夕方でもまだ暑いわよ、庭掃除なんて熱中症になるから早くお上がりなさいな。ああ、衿もそんなにきつくして」

「あ……大丈夫です、その、それより先程修一朗さんがお探しになっていて……っ」

お義母様はとてもお優しい方だ。

分家育ちで作法に疎いわたしにも嫌味を言うようなこともなく、いつも

丁寧に教えてくれる。

むしろ「本当は女の子が欲しかったのよね」と笑って自分の子供のように大切にしてくれる、本当に素敵な方だ。

「修一朗が？」

「すみません、わたし……お義母様が離れにいらっしやると思つて、修一朗さんにそうお伝えしてしまつて」

「ああ、さつきまで居たのよ。お見送りで玄関まで行つていてね」

伝えてくれてありがとうね、と笑うお義母様の眼差しは修一朗さんと同じく、暖かくて柔らかい。

この視線を感じると、少しでも森宮家の役に立ちたい気持ちが膨らんでいくばかりだ。

ぎゅっと箒の柄を握つて離れに向かうお義母様を見送ろうとしたところで、お義母様がふと振り返つた。

「桜子さん。いつも本当に器量が良くて助かるけれど、もう少し身体を大事

になさって頂戴ね」

「そ、そんな……わたしは全然、まだまだお役に立てないばかりで」

「気にしないでいいの。あの仕事ばかりの修一朗と居てくれるだけで十分なのよ。……ふふ、でも、楽しみだわ」

なにがだろう、と思わずまばたきをした。

目尻が柔らかく下がり、うつすらと笑い皺が浮かぶ。これも修一朗さんと一緒に。

「跡継ぎが、ね」

「——あ……」

「ふふふ、不躰でごめんなさいね、きつとさぞかし可愛かろうと思うのよ。じゃあまたお夕飯でね」

良い意味で、言ってくださっているのはわかる。

けれど冷水をかけられたような心地だ。去っていく背中を見ながら、足元がぐらつく感覚にまた慌ててぎゅつと箸の柄を握った。

跡継ぎを、つくる。

そうだ。それが、わたしに与えられた役割のはずだ。

けれどわたしと修一朗さんの間には、そんな触れ合いどころか、キスすら
—— 額だけで。

（わたしは——……わたし、では……）

太陽が沈みきる。あかね色に染まっていた空は気付けば闇が覆いはじめ
ていた。

屋敷の通りを走っていた子供たちの声が聞こえなくなり、完全に夜の帳
が下りる頃まで、わたしはその場から動けずにいた。



（お夕飯、あんまり喋らなくてすんで助かった……）

お風呂からあがって歩きながらひと息つく。

今日はお義母様と修一朗さんの仕事に関する話が多かった。お義母様に
変に気にしていると思われるたくなかったから、聞くだけなのは助かった。
寝巻き浴衣で部屋に戻りながら、考える。

（どうしよう、声……かけてみるとか？ でも、ふしだらな女と思われたら、
いやだな……）

跡継ぎがほしい、なんて。

自分から言うのはあんまりじゃないだろうか。

思い悩みながら部屋に戻ると、いつもこの時間には居ない修一朗さんが
いた。

「……？ 修一朗さん、今日は早いんですね」

「ああ、用があつてね。使っていない家具がないかと……。……桜子さん」

あまり物の入っていない、小さめの桐箆笥を物色していたらしい修一朗さんがぱつと顔を上げ、すぐに真剣な面持ちになる。

どうしたのかと思つて近付くと、少し身を引かれてしまった。逸らされた視線が彷徨っている。

「……いや、すまない。珍しい姿だったものだから」

「？　そうでしょうか」

「ああ。まだ髪が濡れている。早く乾かしたほうがいい、……」

首を傾けると、修一朗さんはぐつと眉根に力を込めて言葉を止めてしまった。

どうしたのだらうと思つていたら、下から掬うように手が伸びる

額に張り付いていた髪の毛を梳くように指が触れて、暖かな体温が直に伝わってきた。

「——？　修一朗さん、なんだかすぐく……真剣な顔、してる」

いつも穏やかに微笑む目元が引き締まり、わたしのことをまつすぐに捉えていた。

どきりと心臓が波打つ。今まで向けられたことのない、どこか熱を帯びた視線に感じて思わず瞼を伏せた——そのときだった。

「だんなさま、旦那様ー、どこにいらつしやいますかー？」

「ご相談があるのですがー！」

使用人たちの声が聞こえてきて、修一朗さんはさっと手を引つ込めてしまった。

「……すまなかつた。早く乾かすんだよ、桜子さん」

「あ……は、はい……！」

少し眉尻を下げた、名残惜しげな視線にまた心臓が跳ねる。

修一朗さんが部屋から出てゆき、ひとりの使用人とどこかに行くのを眺めた後、ぼんやりとしたまま鏡台へと座りドライヤーを手を取った。

スイッチを押そうとした——その矢先。

“桜子さんはどうなさるのでしょうね？”
“さあ。彼女も別部屋なんじゃないか”

残った使用人たちの話し声が聞こえてきた。

部屋には修一朗さんしかいなかったと思っっているのだろう。大きな声で喋っていて、思わず身体が固まった。

どういふことだろうか。

わたしが、別部屋に移動する——？
ぐるぐると頭がごちゃつく中で、なおも使用人たちの声が続く。

“しかし全く、旦那様ときたら。自分の家具を使わせるなんて、どういうおつもりなのだろうな”

“私も詳しいことは聞いていないのですが、女性が入られるとかで。もしかしたら、その方を相気に入ってらっしゃるとか……！？”
“はははっ。ありうるな”

——今、何て。

新しい方が来て、その方が、修一朗さんの家具を使う。そしてわたしは別部屋に、だって？

（そんなの、って）

目の前が真つ暗になって、肩が震える。

まだ濡れた毛先からぼたりと水滴が落ちた。

乾かすことはできなかった。呆然としたまま、自分用の桐筆筒の前まで、よろめきながら足を進めた。



「……桜子さん？」

「あ——おかえりなさい、修一朗さん」

桐筆筒のものをまとめていたら、いつも修一朗さんが部屋に戻ってくる時間になってしまった。

目線を合わせないまま手を動かす。中途半端にものを出しっぱなしではいけないと思って急いでまとめていたら、すぐそばに膝をつかれた。

「何をしているんだ」

「あ……」

ぐくりと唾を飲み込む。

いつもこの時間わたしは本を読んでいたから、様子が違うことに驚いたのだろう。屈んで顔を覗き込んでくる修一朗さんから逃げるように顔を背ける。

「片付けを、していました」

「その話か。もう聞いていたんだな」

「……はい。修一朗さん、申し訳ございませんでした。わたし、今まで大変ご迷惑を」

「迷惑？」

怪訝そうな声に喉が詰まる。堪えなければと、ぎゅっと拳を握った。乾ききつていない髪の毛がぱりと肩にかかる。

いつもだつたらまとめておくのだが、それも出来なかった。茫洋としたまま、片付けをしていたから。

「……はい。無理をさせてしまっていたのだな、と」
「何の話をしている」

修一朗さんの声のトーンが少し下がった。初めてのことだった。

今まで感じたことのない、恐れとも怯えともつかない感情で目の前が塗り潰される。

顔を見ることが出来ないまま、立ち上がろうと膝を立てたが、止められてしまった。

大きな手のひらで、手の甲を覆われる。

「——……。わたしは、大丈夫ですから」

「桜子さん。何の話か聞いている」

「……っ」

皆まで言わすなんて。

震える唇を噛みしめる。言ってしまったら、もうおしまいな気がして恐ろしかった。

（……いや。そもそも、最初から——）

始まってなど、いなかったのだろう。
わたしと修一朗さんの間には、何も。

「別部屋に……行くのでしょうか、わたしは。構いませんから」
「何が構わないんだ」

「ですから——……あ、跡継ぎは、わたし以外の方とお作りにつ、……きや、っ？」

ひどく掠れた声をどうにか絞り出し、覆われた手を引いたときだった。どさり、と先に音が聞こえた。視界が暗い。

何をされたのかよくわからないでいる中で、目の前から低い、腹の奥まで轟くような声音が聞こえてきた。

「それは、本気で、言っているのか」

薄暗い豆電球が、修一郎さんの影に隠れて一層暗い。身じろごうとしてようやく気付く。

両手首とも、畳に押さえつけられていた。太腿は修一郎さんの逞しい足で押さえられていてまったく動くことができない。

ずっと合わせられずにいた目線を向けた瞬間——底冷えのするような暗い熱を孕んだ瞳とかち合つて、ひゅつと喉が鳴った。

「ほ、本気で……っお役に立てないなら、せめて邪魔にならないようにと」
「そうか」

言葉を切るような短い返答だった。

いつもの穏やかな口調からは想像もできないほどだ。その時になつてようやく、修一朗さんの身体がわたしを簡単に覆い隠すほど大きかったことを認識する。

「何も分かっていなかったのだな、君は」

心臓に、大きな氷を押し当てられたみたいだった。

反射的な恐れに身を振り、畳を蹴って身体をずり上げようとした。

けれど虚しい抵抗だった。暴れる身体をいとも簡単に抱き上げられ、敷いてあった布団へと降ろされる。

痛みこそないが、普段あれほど優しい手つきは見る影もないほどの強引さだった。

「や……っ何、分かっていなかったって、何が——っひ、」

「何もかも。それとも何だ。君は跡継ぎを作るというのが、どういうことかも分かっていないのか？」

「……！　そ、それぐらひは、分かつてっ……ん、や……っ！」

覆い被さってきた修一朗さんに、寝間着の浴衣の中に指を差し入れられる。

昼間は隠すように直してくれた衿元を、今度は暴かれるようだった。思わず引きつった声を上げたところで、額にぱさりと前髪がかかった。

柔らかくて、少し長い前髪。

少しうねりのあるそれが広い二重によく似合っていて格好いいなって、いつも思っていたのに。

「なら、つまり私が君以外を抱いて——それで平気だと、そう言っているんだな？」

「……っ？　だ、だって、わたしなんかじゃ——んう……っ！」

必死に言葉を返そうとした口を、塞がれてしまった。

ちゅ、といやに甘ったるい、場違いな音が聞こえる。戸惑っているうちに震える唇をこじ開けるように分厚い舌が入ってきた。

（うう、なにこれ、口いっぱいになる……！ わたし、初めてのキスなのに、っ
んん……？♡ や……っ、上顎のそこ舐められるのやだ、くすぐりたい♡
こんなの、知らない……っ！♡）

まるで口の中を蹂躪されているようだ。

引っ込めていた舌を絡ませられて、くちゆりと水音が鳴った。上顎と口内を、隅々まで確かめるようになぞられて息ができない。

酸素すらも奪われるような、長い長い、貪るようなキス。

ようやく解放された時には、もう息も絶え絶えだった。

「……は、っふ……んう……♡」

「……ずるいな。そんな、とろけた顔をして」

「ふあ……？　っあ、……っや、待っ……、んん……っ！♡」

何かを考える暇もない。必死に酸素を取り込もうと息を繰り返していたら、耳のすぐ下をかぷ♡ と甘噛みされて肩が竦んだ。

「私は、ずっとこうすることばかり考えていたというのに」
「へ……う、うそ、あ……っ!?!♡」

ちゅう……っ♡ と強めに吸い付かれてぴくりと肩が大袈裟に跳ねた。まるで捕食されているような所作に、徐々に霞がかかる頭で、必死に言われたことを手繰り寄せた。

ずっと、こうすることばかり考えていた、だって――？

「ん、……嘘だと思うのか？」
「だ、だって……キスすら、一度も、んうう……っ!?!♡」

ちゅ♡ ちゅう……っ♡ すりすり、ふに……っ♡
あえぐように返そうとした瞬間、また塞がれる。

逞しい肩口を押そうとしたけれど、またあの貪るみたいなキスと一緒に太腿を撫でられてびく、とまた身体が跳ねてしまった。

内側の柔らかな肉に指が食い込んで、丸みを確かめるように撫でていく。

「我慢していたんだ。君が、……いや」

「なに、……うあつ!?♡ あ、待って、そこ、やあ……っ♡」

「私が、止まらないことを分かっていたから」

「そんな、うあつ、あ、……っあ……♡♡」

囁きかけられる言葉を認識した途端、ぞわぞわとした感覚が強まった。

するする……♡ と太腿を辿る手にぐっと力をかけられて、無理やり足を開かされてしまった。

薄い下着の、足の付け根のところの縫い目を辿られる。

恥ずかしいのに閉じることができない。抑えつけられているからというのはあるけれど、それだけではなくて。

（修一朗さん、我慢してたって、ほんとに……? 全然そんな素振りなかった

たのに……信じられない、あつ？♡ うそ、おまんこの、割れ目のところ……スリスリされちゃってる……♡♡ 抑えてる力、強いのに……そだけ優しくさわさわするの駄目♡ うう、最近ひとりですてなかつたから、敏感になってる……♡♡

スリスリ……♡ と何度も往復されるうちに布地がおまんこにぴつたりとくっついていく。

優しく撫でられるのを嬉しがるみたいにクリトリスがぷく♡ と浮き上がってくるのが自分でわかつて、顔も首も真っ赤になってしまった。

「すごいな。桜子さん、……君とこうするところを、ずっと想像していたが」
「は、……っやあ、なに、や、や……♡」
「想像より、ずっと素直で——……かわいい」

カリ……♡

内緒話をするみたいなの、甘くて低い囁きと一緒に浮き上がったクリトリスを布越しに引っ搔かれて、きゅつと喉が引きつった。

さつきからずっと信じられないことばかりだ。

言われたことも、されていることもどこか現実じゃないみたいで、それなのに触られる度、身体はどんどん敏感になっていつて。

「あ、あ、あ♡ やら、ま、……つてえ、しゅ、いちろさ、……っ♡」

「待てない。言つたろう、止まれないと。君が悪い」

「っふえ、なんで、……あ……っ!?!♡ やめ、っうあ、あー……♡♡」

カリカリッ♡ こりこり♡ かりかりかり……♡

責めるような言葉と裏腹に指先は優しく、ぷっくり♡ 浮き上がったク

リトリスを甘く引つ搔かれておかしくなりそうだ。

変な声が出てしまうのに、そのたびにわたしを見据える修一朗さんの瞳が熱っぽく揺らぐから、唇を噛むこともできない。

（だめ、これ、ちょっと引つ搔かれてるだけなのに……っ♡ なんでこんな、ぞわぞわするの……?!♡ あ、あ、割れ目スリスリ辿られて、根本のほうから弾くみたいにカリッ♡ カリッ♡ つてするのやだ♡ 自分じゃ知らない

い触り方されて……ううだめ、パンツ、濡れちゃう……っ♡♡

「……ああ。すごいな、色が……変わってきてる」

「っえあ、うそ、やらあ、やめ、……っんうう！？♡」

じゅわあ……♡ と、溢れてきてしまった愛液を確かめるみたいに中指の腹でなぞられる。布からも溢れて、修一朗さんの指が濡れてしまった。あまりに恥ずかしくて腰を引こうとしたら、むしろ引き寄せられて、濡れた指腹でぬち♡ とクリトリスの先っぽをなぞられてしまった。

「ここが、好きみたいだな。さつきから引つ搔くたび、割れ目をぱくぱく開かせて……」

「ッ！？♡ して、な……っお♡ あ♡ やら、なでちや、っんやああ……っ♡♡」

くりゅっ♡ ぬりゅ♡ ぬちぬちぬちっ♡♡
すっかり形も色も浮き上がってしまったそこを濡れた指で撫で回されて

足にぐぐっ♡ と力がこもる。

どうしてだとか、恥ずかしいとか、あらゆる感情が快感で塗り潰される。何をされているかも分からなくなりかけていたとき、下着の縁が軽く引つ張られた。

わたしの手とは比にならないくらい大きな手に、するする……♡ と膝までおろされてしまう。

「あ……っ？♡ うそ、修一朗さ……いま、だめ、直接だめ……っ♡♡」

「今は駄目？ ならいつならいいんだ。言ったらろう、ずっと我慢していたと……ああ、糸を引いて。クリトリスも真っ赤になつて、ぴくぴく震わせて……」

「や、や……だめ、待って、触っちゃ、」

「待たない。——こんな事なら、早く奪つてしまえばよかった」

「そん、な……っうあ、だめ、っ……ああ、あゝっ♡♡」

ぬりゅ♡ ぬりゅっ♡ にち♡ にちにちっ♡

片指でおまんこのお肉を引つ張られて、もう片手の濡れた親指でクリト

リスをこね回されて、とうとう足先がぴいんっ!!♡ と引きつった♡

(ひっ♡ ひ……っ♡♡ だめ、これえ♡ 自分じゃできないうごき、されてる♡ おまんこグイって引っ張られてるせいで、クリむき出しになつてるとこ、やさしくくるくる撫でられて……♡ きもちいいよ♡ うう、勝手に足ひらいて、ガニ股になっちゃう……っ♡♡ だめ、だめ、これ……きちゃう、いっちゃうう……っ♡)

くちくち♡ くちくちくち……っ♡♡

「ひあッ♡♡ ううっだめ、とめ……っとめて、あ、あ、彗っ、んぐ、うゝゝ……っっ!!♡♡」

びくびくびく……っ♡

布団から背筋が浮き上がる。頭に突き抜けるような快感が響いて何度も腰が跳ねる。それなのに修一朗さんは指を離してくれなくて、むしろ快感を閉じ込めるようにギュッ♡ と指腹でクリトリスを圧迫してきた。

余韻が長くて中々収まらない。

ほとんど焦点の合わない目をしながら、はー……♡ はー……♡ とはしたない息を漏らしていたら、ずっと射抜くようにわたしの顔を見ていた修一朗さんが突然視界から消えた。

「あ……？ しゅ、修一朗さん、っうあ？♡」

「言っておくが、まだ終わりじゃないぞ」

「う、うそ……待って、ほんとに、んう……っ！」

口振りは固いの、鎖骨を這う唇はひどく情熱的で頭が焼き切れそうだった。ちゅ、ちゅ♡ と何度か確かめるように、はだけた胸元に口づけられる。

そのまま吸い付かれて痕を残されて、いったばかりの全身がぞわりと震えた。

いちど痕をつけられただけではなかった。

乱れきった浴衣の紐をほどかれて、胸の膨らみに何個も吸い付かれ、肋骨の下にも、腰骨の近くの柔い肉にもちゅう……っ♡ と甘やかに吸われて、無数の痕をつけられる。

（うう、なんでこんな……痕、つけるの……？♡唇、だんだん下にいつて……くすぐりたい……♡）
「っというか、どうして急にこんなこと……っひゃ、足の付け根のそこ、やだ……っ♡」

「……本当に、敏感だな。少し吸い付くだけで腰を跳ねさせて、まるで誘っているみたいだ」

「……っそ、それは……修一朗さんだから……っ」

「私だから？ ……さっきは、跡継ぎはわたし以外とお作りに、と言っていた癖に？」

低く轟く声にぐつと喉が締まる。

詰められていて怖いはずなのに、とうとう下まで辿り着いてしまった修一朗さんの唇がまた甘やかに吸い付くから何も言えなくなってしまう。

顔を向けたら、大きな身体を屈ませているのが見えて思わずこくりと唾を飲み込んだ。

「私は……君以外となんて、考えたこともなかったのに」

「う、うそ……っあ？ え、待って……修一朗さん、そこ、だめ……舐めちゃ、あ、あああ……っ！？♡♡」

ちゅう……っ♡ れろ♡ ちゅうううっ♡♡

さっきイッたばかりのクリトリスに激しく吸い付かれてびぐんっ♡ と足先が震え、ガニ股になってしまった♡

慌てて足で布団を蹴って逃げようとしたけれど、両方とも抱えるように掴まれてしまった。

固定されて、快感の逃げ場もない。

「こら、暴れると危ない。歯が当たってしまっぞ」

「ひっ♡ ひいんっ♡ ううっだって、なめるからあ、あ♡」

「んっ……ふ、気持ちいいんだろう？ ほら、舐める度に……すごいな、とろとろ溢れてくる」

「ふあっ？♡ あっだめ、おまんこ、なぞっちゃ、あ、おー……っ♡♡」

れっっ♡ れろれろ♡ ちろちろちろ……♡♡

分厚い舌が、おまんこの割れ目から溢れる愛液を掬うように辿って、最後はクリトリスを騷る。

落ち着きかけた快感があつという間に戻ってきて、善がつているのが丸出しの声が出てしまつて信じられないぐらい恥ずかしい。

(なにこれえ……っ♡ 指でされるのと、ちがう♡ 分厚くて熱い舌でちろちろ舐められてると、ずーっと気持ちよくて……っあダメ♡♡ ちゅうちゅう吸うのダメ、わかんなくなっちゃう、きもちよすぎて♡ 初めて、なの……っ腰、くいって持ち上げて♡ もっと吸ってえ♡ って、しちゃう……♡♡)

れろ♡ ちゅ♡ ちゅううううっっ♡♡

腰が持ち上がったのにすぐ気づかれて強めに吸われて頭がバカになりそうだった。

こんなのおかしい。さつきまで触れられていないことに、あんなに悩んでいたはずなのに。

「ん……本当に素直だな、吸う度に腰を持ち上げて。そんなにここ……クリトリスが好きか……？」

「っつや♡ ちが、しらない……っうああ♡ ううっこんなこと、されたこと、ない……♡」
「……ない？」

ぴく、と修一朗さんの肩が揺れた。

雰囲気が変わった気がして、ひぐ、と喉を鳴らしながら何度もうなずく。これで少し優しくしてくれたのかも——って、思ったのに。

遅い指が、にゅち♡ と、すっかり濡れそぼった割れ目をかき分けて。
おまんこの、浅いところまで、潜り込まれてしまった……♡

「うああ……っ!?!♡ まって、ゆび、んうう……っ!?!♡」

「ないんだな? 布越しのクリトリスを引っ搔かれて、とろとろの愛液を滲ませたことも、直接接触られてイったことも……」

「ふあ……あつ、ない、ない……っ♡」

「舌で吸われたことも、こうしてナカに指を入れられて、かき回されたことも？」

ぬちゅぬちゅ♡ かき回されて、訳も分からないまま、ない、と掠れた声で言ったとき。

修一朗さんの瞳に灯った熱がまた一段階、温度を上げた。
ふ、と熱い息がおまんこにかかって思わずビクン♡ と腰が跳ねる。

「——……俺が、初めてなんだな」

「あ、ん……っ♡ はじ、はじめてえ、っふあ！？♡ ひっ、だめ、それ、うあ、あゝ……っ♡♡」

ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ずぼずぼっ♡

れろれろ♡ れろ、ちゅうう……♡♡

中の浅いところに二本目の指が入ってきて、何度も出し入れされる。それと一緒にクリトリスに舌を差し入れられて、キュウウ……♡ と内壁が締まった。

丁寧で、けれど遠慮がないその手つきをもう嫌がることもできない。

（きもちいい♡ おまんこズポズポってされながら、クリちゅうちゅう吸われるの、きもちよすぎて♡ あたまバカになっちゃう♡ こんなえっちなことされて♡ 絶対だめなのに、もつと抵抗して、ちゃんと話を……っあ♡ だめ、吸った先っぽちろちろ舐めないで、だめ、だめ、また、きちやう……っ♡♡）

「ん……イきそうか？」

「うあっ？♡ あ、なんで、っひいん♡ んん、く、うう……っ♡♡」

「さっきイったときみたいに、腰がカクカク小刻みに震えているから、……わかりやすく可愛いな。こらえなくていい。次はちゃんとやってごらん」

「ふえ……っ？♡ な、なにを、んひ……っ♡」

「イク、って。さっきは……言えなかったろう？」

いつの間にか、修一朗さんの声がひどく甘い。

囁き声の合間にも絶頂を誘うようにチロチロチロ……っ♡ と舐められ

て身体が引き攣ってきてしまった。

「ほら、見せてくれ。俺の手と舌で、もう一回イくところ……」
「……っふあ、あ、あ、あ……っ♡♡」

ちゅぽ♡ ちゅぽ♡ こりこりこり♡ ぢゅ……っ♡♡
何度も節くれ立った指を出し入れされて、導くように吸い付かれて。
津波に攫われるように、意識が快感で塗り潰された。

「おう……ううっ、ぐめ、もお……っしゅ、いちづ、さんツ♡ あっイく、
いく、おまんこ、なめられ、てえ♡ イっちやううっ、ああ、うっ、あああ
……っ♡♡」

び……くんっっ！♡♡ びくっ♡
ぷしっ♡ ぷしゃ……っ♡♡ カクカクカク……♡♡

何か、おしっこが漏れるみたいな感覚があったけど、それどころじゃなかった。何度も身体が小刻みに跳ね、おまんこがヒクヒク♡ 収縮する。

（は、うう♡ ま、またイっちゃった、わたし……♡ て、ていうか、あれ……っ？ やだ……わたし、潮吹きしちゃった……っ？ うそでしょ、したことないのに……っうあ？♡）

未だちよろちよろと溢れるものが恥ずかしくて、腰を引こうとした途端——ぢゅう、と。

なにか、吸い付くような音が響いた。

「——♡……っ！？♡♡」

飛び散ったそれを拭うように、れろ……♡ と舐め取られて。

それから顔を上げた修一朗さんの太い喉が、ごくん、と嚥下するのが見え、あまりの恥ずかしさに喉が詰まった。

「これも、初めてだろう？」

「……！？ は、はじめてに、決まって、……っ」

言葉聞いて、さっきまで冷徹なほどの視線で射抜いていた修一朗さんが、ふと柔らかな表情を浮かべる。

その顔を見た瞬間だった。

（………）

怒涛の快感に沸騰していた頭が徐々に冷めて、今のことを思い起こす度にいろんな感情が押し寄せてきた。

突然、怒った修一朗さんに押し倒されて驚いたこと。

たくさん我慢していたという言葉を聞いたこと。

二回もイってしまつて恥ずかしかったこと。

触ってもらえて——少し怖かったけれど。

やっぱり、嬉しかったこと。

「……？ 桜子さん、……桜子さん、どうし——……」

「……っう、……っく、」

いろんな感情が緬い交ぜになって、ひくりと肩が揺れて。
じんわりと視界がぼやけ、目尻に涙の粒がたまつた、そのすぐ後だった。
一気に青ざめた修一朗さんが、呆然とした口調で一言呟いた。

「……………すまない。こんなつもりじゃ、なかった」